
Cross

達樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross

【Nコード】

N0393Y

【作者名】

達樹

【あらすじ】

花夜子と千世。血のつながらない姉妹である二人は、ごく普通の大学生。花夜子は中学からの同級生である陽斗のことが好きだが、陽斗は千世に想いを寄せている。一方千世は一流企業に就職が決まり、その会社の専務に恋をする。千世が恋をした男の本性を知った花夜子は、何とか千世を諦めさせようとするが…… サイトにて掲載中の作品です。

登場人物紹介

せんざき 花夜子

自分には何の取り柄もないと思っている女子大生。亡くなった父の再婚相手・葵の連れ子である千世とは 誕生日、年齢が同じで仲も良いが、彼女に対してさまざまなコンプレックスを持っている。

せんざき 千世

母親の再婚により、花夜子と義理の姉妹になる。天然でおっとりした性格の美人。さっぱりした性格で心から人に信頼される花夜子をうらやましく思っている。

こばやし 陽斗

花夜子、千世とは中学の頃からの付き合い。薬剤師を目指し薬学部に在籍。成績優秀で、大学入学当初から首席をキープ。

おのみや 珠樹

千世の内定先企業の専務取締役。父が社長のため、若くして専務という役職を与えられたことを批判的に見る者もいるが、実際彼自身はその肩書きに見合うだけの実力を持っている。

せんざき 徹

花夜子の父親。大病院勤務医であったが、花夜子と千世が大学入学直後に死亡。自殺とされているが、真相は不明。

せんざき 葵

千世の母親。表向きは家族を大切にする良き妻、良き母であるが、実際には徹と千世だけを愛しており、花夜子のことを嫌悪している。

千世と私は、血のつながらない姉妹だ。

私には母親の記憶がない。そんな私が6歳になったばかりの頃、父が知らない女の人をつれて来た。今日からお前のお母さんになる人だ、と。にこりと微笑んだその人を、私はきれいだと思った。けれどどこか冷たいその微笑に、背筋が冷えたことも覚えている。

千世はその人の子ともだった。偶然にも生まれた年、誕生日までもが同じだった私たちが仲良くなるのに、それほど時間はかからなかった。生まれた時間は千世の方が先。その日から、千世は私の姉になった。事情を知らない人たちは、今でも私たちを本当の双子の姉妹だと思っている。顔が似ていないことを不思議に思っても、それほど気にはしていないようだ。

父は大学病院に勤める医者だった。そこそこの知れた外科医で、患者からの評判も良かったと聞いている。麻酔科医である千世の母親が父の勤務する病院に赴任して来てから、よく同じチームでオペを行なうようになった。それが二人の交際のきっかけであることは、誰に聞かなくても理解できた。父があの人をつれて来る前、とても優秀な麻酔科医が入って来た、若いのに現場での確な判断ができて解力もある、彼女と一緒にのオペはやりやすい、と言っていたのを思い出す。もっとも、当時の私はオペの意味も「優秀な麻酔科医」がどんなものかもまったくわかってはいなかったけれど。

父と千世の母親は、本当に仲の良い夫婦だった。父は私と千世、千世の母親を愛してくれた。けれど千世の母親が愛したのは、千世と、私の父だけ。表面上は慈愛に満ちた母親の表情で私と千世を見る。だから、あの人の悪魔のような顔は、私以外誰も知らない。彼女は私を疎ましく思っている。

私と千世が大学に入学したばかりの春、父が死んだ。自分が起こした医療事故により、患者を死なせてしまったことを悔いての自殺

だとマスコミは報道したが、私はそれがたらめだとわかっている。父は自分の命で罪を償うなんてことはしない人だ。命を差し出して何になる。死んでも犯した罪を償えるはずがないことを、父は知っていた。

「花夜子、千世」

父の葬儀が行なわれた日、悲しみに沈む私たちに、同じく悲しうに声をかけてきたのは、中学からの長い付き合いである陽斗だった。私たちは、高校、大学と、三人そろって同じ学校に進学した。腐れ縁だ、なんて言うてはいるけれど、実は違う。

私は陽斗が好きだ。人間として、一人の男として。だから陽斗が受験すると言った高校を受験した。少しでも長く陽斗のそばにいたくて。千世は私と同じ学校に行きたいからという理由だけであつさり第1志望校を変更し、私と陽斗が受験する高校に願書を出した。大学を決めた時も同じ。特に大学受験の時は、私なんて必死に勉強してやっと合格できたのに、陽斗と千世は簡単に受かってしまった。そうして陽斗のそばにいたために努力をしてきたけれど、気持ちはいまだに打ち明けられずにいる。なぜなら陽斗が想いを寄せているのは私ではなく、千世だと知っているから。鈍い千世は陽斗の気持ちに気付いていない。

「大変だったな。急なことで俺も驚いた。二人とも大丈夫か？俺にできることがあれば何でも言ってくれてかまわないからな」

「はるくん、わたし……」

目にいっぱい涙を溜めて、千世は陽斗を見上げた。陽斗が千世の頭を撫でると、千世は堪えきれずに嗚咽を漏らし、うつむいて陽斗の喪服の袖をにぎりしめる。そんな二人を見ているのがつらくて、私はくるりと二人に背を向け、下唇を噛んだ。

私だって、泣きたい。たった一人の、血のつながった本当の家族を亡くしたのだ。その上私の好きな男が一番に心配しているのは、私ではなく千世。いつだってそうだ。陽斗の一番は、いつだって千世。それなのに千世は陽斗の気持ちに気付かず、こうして陽斗のやさしさに甘える。陽斗のことを男として見たことなんて一度もないくせに。

「花夜子、花夜子ごめんね。わたし何もできなくて……。一番悲しいのは花夜子なのに」

けれど千世には悪気なんてないのだ。千世は私の気持ちも、陽斗の気持ちも知らないのだから。私を抱きしめてぼろぼろと涙を流す千世の背に、私も腕を回した。その瞬間、我慢していた涙が一粒だけ頬を伝う。とてもあたたかい。素直でかわいい千世。誰からも愛される千世。やさしくて大好きで、けれど世界で一番ねたましい、私の姉。

父の死から2年半、私たちは大学3回生の秋を迎えていた。キャンパス内は大学祭の準備をする学生たちの浮かれた雰囲気で、普段の倍以上ざわついている。私たちも、就職活動を本格的に始める時期になった。周りの雰囲気の良いもあり、「就活」という単語に少々敏感になっている私と千世を、陽斗は暢気に笑う。

「大変だな、シュウカツ生は」

「うるさいな。あんただって3年半後はヒイヒイ言ってるわよ」

「それなら心配ない。国家試験は1回でパスしてやるよ」

陽斗は薬剤師になるため、薬学部に在籍し勉強している。高校生

の時に職場体験で私の父の勤める病院に行き、そこで薬剤師の仕事を間近で見たことがきっかけだそう。医師並みに難しい国家試験を甘く見ているような発言をするのは、それだけ自信があるからだろう。それもそのはず、陽斗は入学してから今までずっと、学部内で首席を通している。

「ねえ、エントリースシートが書けない。花夜子、わたしの長所ってなんだと思う？」

「ええー、天然なところ？ 千世って時々異世界の生きものに見える」

「ひどい。それ長所って言えないじゃない。はるくん、助けて。わたしの長所」

「嫌なことがあっても30分寝たら忘れるところ」

「そんなの書いたらばかだって思われちゃうよ」

私たち三人の関係は、何の変化もなく以前のまま。ただ、高校生の時までと少し違うのは、私と陽斗にそれぞれ恋人ができたことくらい。もちろん二人ともすぐに相手と別れてしまった。だって私も陽斗も、好きな人は別にいるのだから。陽斗はそれ以来彼女を作らない。けれど私は、今付き合っている彼で3人目。その彼との仲も、そろそろ怪しくなってきた。

千世には恋人ができない。そもそも千世が男に興味を示すこと自体が珍しいのだ。たとえ男に興味を持ったとしても、それが恋愛感情にまで発展することはなかった。陽斗がいい例だ。その上千世は美人でスタイルもいい。けれど人見知りで、仲の良い人以外にはほとんど笑顔を見せないから、周囲の男にとっては近寄り難い、いわゆる「高嶺の花」的な存在なのだろう。千世に言い寄ってくる男を、私は今まで一人も見ることがない。もちろん本当に一人もいなかったわけではないだろうけれど、千世が誰かと付き合っているという話を本人からも、周りの誰からも聞いていないのだから、たぶん千

世は申し出をすべて断っている。

私は、早く千世に恋人ができればと思っている。そうすれば、もしかしたら陽斗は、千世を諦めるかもしれない。自己中心的で浅ましい考えだとは思っけれど、仕方がない。私はそういう人間だ。

内定をもらったという話を千世から聞いたのは、3月に入つてすぐのことだった。あまりに唐突な報告に私はぽかんとすることしかできず、やつと出てきた言葉が「あ、おめでとう」というなんとも味気ない一言。けれど千世は、このうれしい結果が腑に落ちないようだった。

「わたし、なんで採用されたんだろう。今回は今まで以上にだめだと思つてたのに」

千世はこれまで就職活動が続けてきて、書類審査や筆記試験で不合格になったことがない。けれど面接に進んだ途端に落ちる。原因は千世もわかつていた。面接やグループディスカッションなど、初めて会う人たちと話をするのは、人見知りの千世にとって最も苦手と言つていいことだ。千世は面接試験の前日から誰が見てもわかるほど元気がなく、当日は緊張のためほとんど何も自分のことを伝えられずに試験を終えて帰つて来ていた。

その千世が、私よりも先に内定を獲得した。しかも、テレビなどで名前をよく耳にする、大手医療機器メーカーの内定だ。千世がどうせだめだと思ひながらも履歴書を送つたのは、この企業が実施する試験が筆記試験と2度の個人面接のみだったからだそうだ。しかも最終面接は社長との1対1の面接で、これはもうほぼ意思確認と言つていい程度のものだと大学の就職課から言われたのだとか。受けてみると実際その通りで、社長面接は「うちに来る気があります

か」という質問をされた以外は10分ほどの雑談で終わってしまっ
たらしい。そして採用。

千世が疑問に思っているのは、社長面接の前の一次面接。今時珍
しいほどの圧迫面接で、厳しい質問をされるたびに千世の心は折れ、
終いには面接官の前で泣き出してしまった。最後に何か言いたいこ
とはあるかと聞かれて千世がしゃくりあげながら答えたのは、「自
分は時々異世界の生きものに見えるような天然ボケ人間らしく、3
0分寝たら嫌なことも忘れてしまうので、きっとこの面接のことは
明日には忘れていきます」というなんともわけのわからないことだっ
た。混乱状態で、以前私と陽斗に言われたことがつい口から出てし
まったらしい。

「まだ卒業まで1年あるけど、でもわたし、ここに行こうって思う。
はるくんは薬剤師で、花夜子も医療業界を志望してるでしょ？ も
う就活続けるの嫌だし、それに……」

そこで言葉を切った千世の頬は、ほんのりピンク色に染まってい
る。恥ずかしそうに視線をさまよわせ、長く息を吐いた千世の口か
ら出た言葉は、私が今まで一度も聞いたことがないものだった。

「花夜子、わたし、好きな人ができた」

千世に好きな男ができた。それは私にとって願ってもないことだったけれど、内定をもらったことと何の関係があるのだろうか。話を聞くと、その相手というのは千世の内定先企業で、千世の面接を担当した社員のうちの一人だという。見た感じではまだ30にも届いていないような若い男で、千世の面接の際にはただ静かに成り行きを見守っているだけだったそうだ。

千世は同じ時間帯に面接を受けるグループの中では順番が一番最後だった。泣きながら面接室を後にし、荷物を取って控え室を出たところで緊張の糸が切れて立っていらなくなり、そのまま廊下に座り込んで泣き続けていた。そこにやって来たのが例の男だ。千世と目線を合わせるようにして床に膝をつき、ハンカチを差し出した。そして笑顔で一言、「お疲れ様でした。最終面接に進んでください」と。千世は男の言った言葉の意味がわからず、涙でぐちゃぐちゃになった顔で男を見つめた。男は困ったように笑う。

「本来ならばこのようなことはあまりないのですが、今回は私の独断で決めました。あなたはとても素直で前向きな方のようにうだ。今日の面接のことは、どうぞ一晩ゆっくり休んできれいさっぱり忘れてください。そして明日の最終面接は笑顔で、社長のおしゃべりに付き合ってあげてくださいね」

そう言つて、男はその場を去った。千世は男に渡されたハンカチを握りしめたまま、しばらく放心状態で動くことができなかった。翌日、きれいさっぱりとまではいかないが、前日の面接の嫌な記憶をほとんど頭から追い出してしまった千世は、男に言われた通り笑顔で社長面接に臨んだ。社長も笑顔を絶やさず、深みのある声でゆつくりと話し、面接は和やかな雰囲気には終始したそうだ。

そこまで聞いた私には、千世の話の中に少し気になる点があった。

「ねえ、独断で千世の面接通過を決めたってことは、その人ただの社員じゃないよね？」

千世は、うーんと少し考える素振りを見せた後、専務つて言つてた気がする、と答えた。その予想もなかった言葉に、私は目を丸くする。

「専務！？ だって千世、30歳にもなっていないくらいだって言つてたじゃない！」

「そうだよ。20代後半だと思う」

千世は何でもなさそうに言う。超がつくほどの大企業で、まだ20代にもかかわらず専務という肩書きを持っているなんて、ただ者じゃない。それを千世はわかってているのだろうか。わかっていてこの反応というのも少しおかしいし、就活をしている身でわからないなんてことなら、それはそれで問題だ。そうは思っけれど、千世のことだから、と妙に納得してしまっている自分もいる。

それにしても、今まで誰にもなびかなかった千世が、たったそれだけのことで恋に落ちてしまうなんて。さぞかし魅力的な男なのだろう。私情もあるが、千世にはその男と幸せになつてほしい。もちろんその男が千世を大切にしてくれるいい男であればの話だけれど。

「それでね、花夜子にちょっとお願いしたいことがあるの」

千世はバッグから男物のハンカチを取り出し、私に見せた。丁寧にアイロンがけされているそれは、おそらく千世が例の男に渡されたというものだろう。

「これ、返しそびれちゃって。最終面接の時は会えなかったから。返しに行きたいんだけど、花夜子、会社まで一緒に行ってくれない？」

たぶん私は今、思いつきり嫌そうな顔をしているんだろう。千世が苦笑している。けれど嫌なのだからしょうがない。そんなの一人で返しに行けばいいのに。なぜ私が、見ず知らずの男にハンカチを返しに行くために、縁もゆかりもない会社にわざわざ足を運ばなければならぬのか。そりゃあ、多少その男に興味はあるけれど。何と言っても千世が好きになった男だ。

けれど会社に行ったところで簡単に会うことなどできるのだろうか。常識的に考えると、アポなしではまず会えない。まして相手は専務だ。無理のような気がする。それを千世に伝えたと、あからさまに「しまった」というような顔をした。

「考えてなかった」

「もうそれ、抜けてるとかそういうレベルじゃない。相手の都合も聞かないでいきなり押しかけるなんて、何考えてるんだって思われるよ」

しかも来年の春からその社員として働こうという人間が。これでは採用したのが間違いだったなどと思われてしまう。とりあえず会ってもらえるかどうかの確認だけでもした方がいいと、私は千世に、会社に電話をするよう促した。千世が「電話嫌い」とぼやいたので、私は千世から携帯を取り上げ、電話帳に登録されている会社の番号を呼び出して発信ボタンを押した。携帯を千世に差し出すと、千世はしぶしぶ受け取り耳に当てる。電話が繋がった瞬間はすぐにわかった。

千世は姿勢を正して顔をこわばらせ、上ずった声で話している。携帯を持つ手は異常なほど震えており、電話一本でそこまで緊張す

るかと思わずつつこみたくなるほどだ。顔の見えない相手に対して大きく首を縦に振りながら返事をし、最後は礼を言いながら深々と頭を下げて電話を切った。

じっと見つめる私に向かい、千世は「だめだった」とため息まじりに呟く。どうやら専務は外出中で、今日は会社に戻る予定がないそうだ。明日以降も業務が立て込んでおり、いつ面会できるかわからない。当然と言えば当然の結果だが、せつかく口実があるのに会えないというのは、やはり多少のショックがあるように見える。

「だったら仕方ないね。会社の人に預けて渡してもらったら？」
「うん……」

あまりの落ち込み様に思わず笑ってしまう。千世がむっとした顔になったので謝ると、会社について行かないと許さないと言われた。例の男に会うわけではなくても、会社に一人で行くのは気が引けるようだ。働き始めたら嫌でも一人で行かなければならなくなるのに、千世に言わせると、どうやらそういう問題ではないらしい。千世は自分があの大きな会社には不釣り合いで、場違いな気がして正面玄関前に立つことすら恥ずかしいと思っているようだ。けれど私が一緒なら、受付の人に話しかけるくらいの勇氣は出る気がするのだとか。今がこの状態なのだから、試験で会社を訪れた時の千世は死にそうだったに違いない。

とりあえず私は、千世のよくわからない理論に付き合っ、会社について行くことにした。

首が痛くなるほど見上げなければ、すべてが視界に入りきらないほど高いビルの前に、私は千世と二人で立っていた。たしかにこのビルに入っていくのは少し勇氣がいるかもしれない。スーツを着て

堂々とこのビルの中に入っていく姿を想像すると、千世でさえ格好よく思えてしまう。

こんな大きな自社ビルを持つほどの企業に、千世は内定をもらったのか。しかも専務に気に入られて。

その専務が言うように、千世は素直で前向きな子だと思う。単純で軽率とも言えるけれど、そんなふうにマイナスに捉えられることが決してないのは、ある意味千世の才能だ。

「花夜子、先に行つて」

「なんでよ。千世が用があるのに。本当なら、私行く必要なんてないんだからね」

こういう臆病なところさえなければ、完璧と言つていい。けれどこんな一面があるからこそ、そばにいて守りたいと思うのかもしれない。私にも女らしさとか可愛げとか、そんなものがあれば、あるいは。

千世にはわからないように、小さく息を吐いた。こうしてすぐに悪い方向に考えてしまうのが、数多くある私の短所の一つだ。長所なんて一つも思いつかないのに、短所ばかりが目立つなんて、最悪。

「花夜子」

千世に腕を引かれて歩を進める。私の方こそこんな大きなビルに入るのは気が進まない。内定をもらっている千世とは違って、私はこの会社とは何の関係もないのだから。

けれど千世は、そんな私のことなどおかまいなしに、半ば私を押し込むようにしてエントランスをくぐった。

大きなオフィスビルの1階と2階部分はガラス張りで開放感があり、コンビニや飲食店など、ここで働く人たちのランチ場所や休憩スペースとしても便利な造りになっている。3階以上がオフィスと

して使われているため、受付も3階にあるのだとか。千世は筆記試験で初めてここを訪れた時、試験会場の掲示に気付かずしばらく迷い、やっとたどり着いた受付で場所を聞いたという経緯から、受付の場所はしつかりと覚えていた。

「あ、あの、わたし、泉崎千世と申します。以前面接の時に、専務にハンカチを、お借りして、そ、それでそれを返しにあの……」

言っている途中で自分でも何を言っているのかわからなくなったように、千世は口を閉じてしまった。けれど受付の人には伝わったようで、「申し訳ありませんが、小野宮はただいま外出しております」という返事が戻ってきた。専務の苗字は小野宮というのか。面接の時に名乗ったらしいが、千世は覚えていなかったため、私にとつては新しい情報だ。

ところで「小野宮」と言えば、この会社も「オノミヤメディカル」だ。社長の苗字も「小野宮」。まさか小野宮専務って、社長の息子とかだったりするのだろうか。ファミリービジネスとか。それならば、若くして専務というポストを与えられているのも納得できる。だからといって、能力のないダメなやつでないことはたしかだ。それなりに仕事が出来人間でなければ、会社のためにもそんな重要なポストは与えない。社長がよほどのアホでなければの話ではあるけれど。

「あ、えっと……さ、先ほどお電話させていただいて、外出されるとするのは、うかがってます。今日はお戻りにならないということ。なので、その、このハンカチを預かっていただいて、専務に返していただけないかと思ひまして……」

ハンカチを差し出した千世に向かい、受付の人は困ったように笑う。そして少しの間の後、「かしこまりました」と言っ手て手を差し

出したその時、男の焦ったような、悲愴感漂う高い声がロビーに響き渡った。

「申し訳ありません！ 申し訳ありません！ 二度とこのようなことがないようにいたします！」

声のする方を見ると、髪が薄く背の低い中年男性が、眼鏡をかけた背の高い若い男にぺこぺこ頭を下げながら、必死に縋っている様子が目に入った。若い男はいかにも機嫌が悪そうで、中年男性を完全無視している。なんだかおかしい構図だ。二人の立場が逆ならば、違和感はないのだけれど。

固まる私と千世の横で、若い男は受付カウンターにとん、と手を置いた。

「予定が変わった。誰でもいいから一人、上から呼んでくれ」

受付の人は返事をしてすぐに受話器を取った。それを見た若い男は中年男性に向かって一言、「お前はもう不要だ」と言い放つ。ひつ、と短い声を発して顔を引きつらせた中年男性は、顔を真っ赤にしてうなだれた。

そんな中年男性をぼけつと見つめていた私のすぐ近くで、思いもよらない人物が声を上げる。

「こ、こんにちは。先日はご迷惑おかけしました。これ、お借りしていたハンカチです」

千世だ。空気が読めないのは知っていたけれど、ここまでだとは思わなかった。今この状況なら、遠慮するのが普通なんじゃないの？ この若い男が小野宮専務か、などと暢気に考えている暇もないほど空気が張り詰める。千世の真っ赤な顔とは対照的に、私の顔は血

の気が引いて真っ青になっていることだろう。

「ああ、こんにちは、泉崎千世さん」

名前をフルネームで覚えていたことに驚くとともに、男の穏やかな微笑に少しだけ気が緩んだのも束の間のことだった。

「それは捨てていただいてかまいませんよ。もう使う気になれませんか、勘違いされても困るので」

ずっと無表情になった男は千世に冷たい視線を投げ、そう言った。言葉の意味を考える前に、その声音で、千世への侮辱を感じ取る。

自分でも驚くほど素早く動いた手は、乾いた音を響かせ、鈍い痛みと熱を持った。実際の動きとは違い、目に映る映像はまるでスロームーションのようだ。

私の数多くある短所の一つ。図らずも、今また新たに認識してしまった。

そういえば、小学生の時にもこんなことがあった。千世に向かつて暴言を吐いた男の子の頬を、私は思いつき引つ叩いたのだ。男の子は泣くし、千世も泣くし、私も泣いた。感情が高ぶってつい手が出てしまった自分が悔しくて。赤くなった男の子の頬が、自分の手よりも痛そうで。悪いことをしたんだと思った次の瞬間には、大声で男の子に謝りながら泣いていた。

成長して、ずいぶん冷静さが身についてきたとは思っていたけれど、いまだに千世や父、陽斗のことをばかにされるとカツと頭に血が上るのがわかる。それでも手をあげることはなかったのに、今回はとうとうやってしまった。おそらく男の視線と声の調子が癪に障ったのだ。千世のことを下種な女とでも言いたげなものだった。実際さっきの言葉は、そういう意味を持たせて発していた気がする。千世や受付の人、中年男性含め、周囲にいた人たちがばかんとこちらを見つめる中、目の前の男は一瞬だけ怒りの表情を見せたがすぐにそれを引っ込め、ひどく落ち着いた声で言った。

「どなたかは存じませんが、何か気に障ることも？」

じんじんとした手の痛みとともに落ち着きかけていた私の心は、この一言で再び波立った。

最悪な男だ。わかっていくくせに。

「気に障りまくりよ！ 千世がわざわざ洗濯して、きれいにアイロンかけて、ここまで足を運んだのよ！ あなたに、ハンカチ一枚を返すただけに！」

「私はそんなことをしてほしいと頼んだ覚えはありません。それに、そこまでしてやっていると言いたいようですが、物を借りている身

としては、むしろそれは当然のことでは？」

「そつ、そうだけど、それでも、受け取るくらいはしなさいよ！
なにがもう使う気になれない、勘違いされると困る、よ！ そつちこそ勘違いしてんじゃないわよ！」

どこまでも冷静な相手と、押されている自分。どちらにも苛立ちが増し、顔に熱が集中する。

こんな言いがかりをつけるようなことをしたいんじゃない。この男に、千世に対して言ったあのひどい言葉を撤回して、謝ってほしいだけ。なのに、怒りが邪魔をしてうまく伝えられない。

「礼儀も常識も知らないおぼっちゃまなら、仕方ないことかもしれないけど」

おまけに負け惜しみのような言葉まで出てしまった。後に引けないところまで、自分で自分を追いつめている。ばかな自分に呆れながらも男から目をそらさずにいると、男の表情が次第に変化していくのがわかった。冷たい印象を与える無表情から、苛立ちを抑えているような表情へ。そしてついには、先ほどちらつと見せたものよりもいくぶんか激しい怒りを露わにした。

今さら気付いたけど、この男、ものすごい美形だ。美形が怒ると、こんなに恐いのか。無表情も少し恐かったけど。男の雰囲気は圧倒されて、額に汗が滲んだ。できれば目をそらしたいけれど、そうすると負けたような気がしてなんだかいやだ。

数秒間にらみ合った後、男がいきなり私の手首をつかんで歩き出した。突然のことでは何が起こっているのかわからず、私は男に引きずられるようにして歩く。受付の人や、誰か知らないけどたった今エレベーターから降りてきた男の人が大声でこの男を呼んでいるのに、こいつは返事もしない。

少し歩いて、エスカレーター横の奥まったところにあるドアの前

で、男は歩みを止めた。背の高い男を見上げると、その顔は冷たい無表情に戻っている。男はドアを開け、私を部屋の中に突き飛ばした。その勢いで前向きに倒れ、「ぎゃっ」という変な声が出てしまう。なんてことをするんだ。乱暴にも程がある。

床に座ったまま男を睨み上げると、男は不気味な笑みを浮かべてじつと私を見下ろしていた。なんだか、身の危険を感じる。

「な、なによ！ 何する気？」

「礼儀も常識も知らないのはどちらかを、教えてあげようと思いついて」

男は靴音を響かせて私に近付き、私の腕を取って立ち上がらせた。私はほとんど力を入れなかったのに、あまりにも軽々と立たされてしまつて驚いていると、男は部屋の中央にあるソファを指し示し、私に座るように促した。拒否しようと思つても無理だ。なぜなら男が私の腕を放してくれないから。しかたがないので、私はおとなしく男に従った。私がソファに座ると、男は向かい側にある革張りの立派な椅子にゆっくりと腰掛けた。

「まず、初対面の相手の頬をいきなり引つ叩くというのは礼儀知らずな行動なのではないですか？」

「そ、そうだけど、でも、あなたが悪いんじゃない！ 千世に言った言葉、取り消してよ！」

「それに、敬語も使わない。常識がないというのは君みたいな人のことを言うんですよ」

「ちよつと、人の話聞いているの？」

「君こそ、人の話を聞いているんですか？」

やっと会話ができたと思つたら、聞いたことを聞き返されただけだった。私はちゃんと話を聞いている。だって答えたじゃない。こ

の男は私の言ったことを無視して、自分の話したいことだけを話している。そんなやつが、「人の話を聞いているのか」だなんて。赤くなっている男の頬を少しだけ気にしていたけど、もう気にするのをやめることにした。

「人の話を聞くというのは、ただ相手の言葉に対して答えることじゃない。言葉を受け止めることです。君は、自分の過ちを指摘され、それを認めたふりをして責任を私に押し付けているだけだ。それは話を聞いているとは言えない。君が私の話をきちんと聞く気があるなら、私も君の話を聞きましょう」

言い返すことができなかった。ムカついたけれど、たしかにそうかもしれない、とも思ったからだ。男の言っていることは正しい。ただ、「お前が言うことを聞けば俺も聞いてやる」というような態度には納得できない。それにこの男、言葉は丁寧なのに、言っていることはほぼ自己中心的。信用できないというか、胡散臭いというか。でも、反抗してばかりではちが明かない。この男は絶対に折れないだろうし。ここは私が大人になってあげよう。

「……わかりました。私が悪かったです。無礼なことをして、申し訳ありませんでした」

「まあ、いいでしょう」

その言い方にまた力チンときて、思わずギロリと男を睨んでしまった。男の鋭い目つきを見て、すぐに目をそらしたけれど。

「それで、君の話というのは？」

「さっき言いました」

「彼女に言った言葉を取り消せ、ということですか？」

「そうです」

男は少しの間黙って考えているようだった。何を考える必要があるのかと、つい言いそうになってしまったが、そうするとまた何かム力つくことを言われそうだったのでやめた。足を組んであごに手をやり、目をつぶって考え込む男をじつと見つめる。美形って、何をしても絵になるのね。腹の立つ男だけど、見惚れるくらい格好いいのは認めるわ。

そんなことを考えていると、男は静かに目を開けて私を見た。

「やはり私に非があるとは思えませんね」

「はあ？」

こいつ、何を言っているの？ 何をどう考えたら、自分に非がないなんて答えにたどりつくわけ？

「君は勘違いだと言いましたが、彼女が私に好意を寄せているのは見ていればわかります。なのであのように言いました。私が、彼女に少しでも気があるなどと思われないように。後々面倒ですから」

「面倒って……あなたなんなの！？ 何様のつもりよ！」

「やはり君は私の話を聞く気がないようですね」

「あつたけどなくしたのよ！ あなたのせいよ！」

「また私のせいですか」

やれやれというように首を振る男の仕草が、私の怒りをさらにかき立てた。どこまで自分勝手な男なの。

もしこれが私に謝れという要求なら、拒否したくなるのもわかる。大企業の専務が、こんな反抗的なただの女子大生に頭を下げるなんてしたくないだろうから。でもそうじゃない。私は、もう少し千世に気をつかって言葉をかけてほしいだけだ。

勘違いされたっていいじゃない。迷惑ならきっぱり断ればいいだ

けの話なんだから。そうすれば千世は諦める。面倒なことにはならない。だって千世はやさしい子だもの。少しずれてはいるけれど、人の気持ちを一番に考えて行動できる、やさしい子だもの。

「はあ……泣かせるほどのことは言っていないつもりですが」

言いたいことはたくさんあるのに、言葉が詰まって出てこない。その代わりに、涙が溢れてとまらなくなった。悔しくて泣くなんて初めてだ。

「困りましたね。ここでハンカチを差し出しても、君は受け取ってくれないでしょうし」

この男は、感謝を込めて借りた物を返そうとしても、その気持ちとともにつき返し、さらには捨てるとまで言う男だ。そんなやつに物を借りたくなんてないと思うのは当然のこと。それに、この男に借りなくても、ハンカチなら持っているし。

少し落ち着くとそのことに思い至り、バッグからハンカチを取り出して涙を拭いた。男は苦笑しながら私を見ている。なんだか、千世の時と似ている気がする。状況や心情はまったく違うけれど。

「ハンカチ、受け取ってあげてください。迷惑かもしれないけど、でも、千世はあなたの心遣いがうれしかったんだと思うんです。その気持ちを伝えるために今日ここに来たのに、受け取ってもらえないどころか捨ててもかまわないって言われるなんて。自分のことだけじゃなくて、少しは千世の気持ちも考えてあげてください」

情けないことに、声が震えてしまった。怒りや悔しさでいっぱいになって泣いてしまった子どもな自分と、ずっと冷静に話を続ける大人な男。比べると恥ずかしくなってしまう、もう男を見ることが

できない。何か言うべきか、このまま黙っていようか。しばらくうつむいたまま考えていると、向かい側に座る男が動く気配がした。思わず顔を上げると、男はずっと私のそばに寄り、微笑んだ。

「行きましようか」

わけがわからずばかんと見上げる私に、男は手を差し出す。

「行きますよ。そろそろ戻らないと。お互いに人を待たせていますからね」

そうだった。千世のことでこの男と話をしていたのに、肝心の千世本人を置き去りにしてきたことをすっかり忘れてしまっていた。差し出された手を無視して勢いよく立ち上がり、ドアの方へ向かう。うしろからは男の靴音。

そもそもこの男が無理矢理私をここに連れて来たのに、まるで私が千世を待たせているみたいに言うのには腹が立つ。私もこの男につつかかって時間を使ってしまったてはいたけれど、その原因もこの男だ。これ以上この自分勝手な男との無駄な話に時間を費やしたくはないし、男はどうやら私の話を無視することに決めたようだし、もうここにいることに意味はない。

ドアを開けようとノブに手をのびしかけた時、男はすばやく私の前に移動してドアを開けた。とっさに口から出そうになった礼の言葉を飲み込み、涙の残る目でちらりと男を見やる。「どうぞ」という言葉には従った。

千世は受付カウンターのそばで、男の人と話をしていた。私たちがあの部屋に入る前、エレベーターから降りてきた人だ。その人がこちらに気付き、「専務！」と声を上げた。千世もその声につられて私たちを見る。

「何をしていたんです？ 至急の用件があつて私を呼び出したんでしょう！」

「君を呼んだわけじゃない。誰でもいいと言つたんだ」

「それでも、呼んでおいて待たせるといふのはどういふことですか！ 私も暇ではないんです！」

「樋口、君は本当につるさい男だな。なぜ木下は君を呼んだりしたんだ」

樋口と呼ばれた男の人は、ちょうど来客対応中の受付の女の人を見た。

「こういう場合は誰が専務のお守りをするべきか、誰が一番適任かをわかつているからでしょう」

「上司に対して言う言葉とは思えないな」

「これくらいは言わせていただかないと。こちらはいつも専務のわがままに振り回されているわけですから」

「人聞きの悪い」

「本当のことでしょう」

上司にこんな態度を取るなんて、怖いもの知らずな人だ。と思つたけれど、初対面の人にあんな態度を取つた私も似たようなものかもしれない。

千世は話をしている男二人を交互に見て、まるで会話を目で追っているようだった。そしてその二人がほぼ同時に千世に目を向けると、びくつと肩をすくめて固まる。

「もう少し時間をもらいたい」

「ええ、どうぞ。事情は木下さんから聞いています。まず何をすべきかはわかっていますね？ わからないというのなら教えてさしあげますが」

樋口さんにそう言われた男は何か言いたそうな顔をしたが、樋口さんの咳払いを聞くと、すぐに人の良さそうな胡散臭い笑みを顔にはりつけて千世に向き直った。千世はうつすらと頬を染める。

あんなことを言われてまだ懲りていないのかと思っただけで、この男の顔で、うそ臭いとはいえ笑顔を向けられたら、こうなってしまうのが普通かもしれない。

「先ほどは申し訳ありませんでした。言い訳にすぎませんが、面倒なことがあつて私も少し気が立っていたもので」

「い、いいえ、わたしが悪かったです。何にも考えてなくて……」
「あなたは悪くありませんよ。ハンカチ、どうもありがとうございます」
「ました」

男が手を差し出すと、千世はためらいながらも男の手にハンカチを置いた。それをジャケットの内ポケットにしまいこんだ男が樋口さんに声をかけると、樋口さんはうなずき、私たちに会釈をしてエレベーターの方へ歩いて行った。

「それでは、私はこれから用があるので、失礼します」

男が向かう先では、エレベーターの扉を押さえて樋口さんが待っている。二人の姿がエレベーターの中に消えた後、私と千世は互いに顔を見合わせて息を吐いた。

会社を出て、千世と並んで歩きながら考えていた。自分は悪くないと言っていた男が、なぜ千世に謝罪し、ハンカチを受け取る気になったのだろうか。

私がそうしろと訴えたから？ …… まさか。樋口さんにプレッシャーをかけられたからでしょ。でも、樋口さんが言うより先に、千世と話そうとしていた。あの男の言動を考えると、私みたいな生意気な女の言うことでも素直に聞き入れるほど、大人のようにも思えなかったのに。

「ねえ、花夜子。ありがとう」

「え？」

「わたしのために怒ってくれて、ありがとう」

隣を歩く千世は、ずっと黙ったままだった。だからてっきり私の軽はずみな行動を怒っているのかと思っていた。いくらムカついたからといっても、あんなふうに引つ叩いていい相手ではなかったのだ。だってあの男は千世の内定先の専務。千世本人がしたわけではなくても、千世の印象が悪くなるのは当たり前だ。千世だって、せっかく行くと決めた会社なのに、あんなことがあれば気まずくて入社をためらってしまうはず。なのに、お礼を言われるなんて。

「最初は怒ってたよ。もうわたしここには入社できないって思った。でも、花夜子があんなことしたのはわたしのためだもん。それに、悪いのはわたしだから。昔からそうだよ。わたし、間が悪いの」

「でもあの人も悪いよ」

「だから謝ってくれた。あんなふうに言われた時はちょっとこわかったけど、機嫌が悪かったからなんだよね。誰にだってそういう時

はあるし。でもやっぱりやさしい人だった」

違うよ千世。あいつはやさしくなんか無い。あれはにせもの。本当のあいつは、乱暴で自分勝手に冷たいやつなんだから。

そう言おうと口を開きかけたところで、千世が急に立ち止まった。

「それより花夜子、ごめんね」

「なにが？」

「怒られたんでしょ？ やさしい人でも、いきなり叩かれたら怒ると思う。わたしもついて行って謝らないといけなかったけど、突然のことでちよつと混乱してて……」

千世はなんだかいろいろと勘違いしているようだ。その勘違いをどこから訂正しようか考えていると、不思議そうに名前を呼ばれた。

「どうしたの？」

「うーん、あのさあ」

「なに？」

「……やっぱりいい。なんでもない」

今本当のことを全部話しても、千世はきつと、そんなことあるはずないと笑って流すだろう。絶対的な「やさしくていい人」を、言葉だけで「最悪なやつ」だと言っても、信じるはずがない。それどころか、千世にとっては根拠のない悪口を言う私の方が印象が悪くなる。千世は、私があつた男に怒られたことに腹を立てて、あの男のことを悪く言っているんだと思うかもしれない。

千世には幸せになってほしい。諦めさせるなら早いほうがいいけれど、今である必要はない。

「ねえ、花夜子」

「なに？」

「今日花夜子のとこ泊まってもいい？」

私は父が死んですぐに一人暮らしを始めた。千世は母親と一緒に私の父の家で暮らしている。父の家であるにもかかわらず私があの家を出たのは、千世の母親がいたから。父のいないあの家で、私と彼女がうまくやっていけるはずがない。父がいた頃でさえそうだったのだ。もちろん、父と千世の前では仲の良いふりをしていた。でもそれも、お互いに限界だった。そして、父の妻である彼女よりも、大学に進学した私が家を出て行くほうが自然でもあった。

「葵さんにだめって言われるんじゃない？」

「うーん、どうかなあ？」

葵さん——千世の母親は、千世の一人暮らしを許さなかった。私が出ると言った時、千世も一人暮らしをしたいと訴えた。葵さんは、私の一人暮らしにはあつさり賛成してくれたけれど、千世の一人暮らしには大反対。自分ひとりではほとんど何もできない千世に一人暮らしは無理だ、というのが理由だ。千世は納得できないと怒り、葵さんと大喧嘩になった。

たしかに千世には一人暮らしは向いていないかもしれない。でもそれは実際にやってみないとわからないことだし、家から大学に通うのは少し不便でもあったので、葵さんがなぜあそこまで反対したのかは私にもよくわからない。

最終的に千世は私と一緒に暮らすと言ったけれど、それも却下された。きつと私に迷惑がかかるから、と。本当の理由は、私と千世をあまり一緒にいさせたくないからではないかと、私は思っている。なぜなら、これまで千世が私のところに泊まりたいと言っても、あの人が許してくれたことは一度もなかったから。千世は友達も多い方ではなく、他の誰かの家に泊まりに行くといい出すこともなか

つたから、本当のところはわからない。ただ単に外泊をさせたくないだけかもしれないけれど。

「あ、でも今日は当直だって言ってた。黙ってればわからないよ」

「だめだって。ちゃんと了解とっておかないと」

「花夜子ってまじめ」

「なに言ってるの。ばれた時怒られるのは千世一人じゃないんだからね」

でもすべて、父が生きていれば許されたことかもしれない。今までも千世と葵さんが対立したことは何度かあったけれど、父が許せば葵さんもしぶしぶではあるが納得していた。

たとえば大学進学の時。千世が志望した大学、学部は、私と同じだった。葵さんは、私には好きなようにしていいと言ったのに、千世には同じようには言わなかった。何もかも私と同じにするのではなく、せめて学部くらいは違うところになさいと、そう言ったのだ。父が、したいと言っことをさせるべきだ、もう子どもじゃないんだから、と言うと、葵さんは静かに涙を流しながら部屋を出て行き、父がその後を追った。しばらくして戻ってきた時には、二人の意見は一致していた。

「あーあ、就職したら、認めてくれるかなあ」

「一人暮らし？」

「うん」

なんでそんなに一人暮らししたいの？ と問うと、だって大人って感じで格好いいから、という答えが返ってきた。お金だってかかるし、そんなに簡単なものでもないのに。憧れるのはわかるけれど、親元で暮らすことの方がはるかに楽だ。特に葵さんは、毎日忙しいのに家事をほとんど一人でこなすから、千世なんて本当に気楽に生

活している。」

「大学生なんて人生で一番暇で楽しい時なんだから、家事くらいやってあげればいいのよ。千世はバイトもしてないんだし」

「花夜子は偉いよね。バイト掛け持ちしてがんばってる」

「高い授業料払ってもらってるんだから、生活費までお世話になるわけにはいかないでしょ」

「耳が痛い」

「だから助けてあげなさいって言ってるの」

「わかってるよう。甘えすぎだっと思ってるもん。でも逆に、花夜子は甘えなさすぎだと思っけどなー。もしかして遠慮してる？」

たしかに遠慮はしている。千世もそう思うくらいだから、よほどよそよそしいのだろう。いまだに「お母さん」ではなく「葵さん」と呼んでいるし、何か困ることがあっても決して相談なんてしない。千世には悪いけれど、おそらくこれから本当の意味で仲良くなることはできないと思う。溝は相当に深い。完全に埋めてなくしてしまうなんて不可能だ。でも千世はそれをわかっていないし、これからそれぞれに気付くことはないだろう。いや、気付かなくてもいいし、気付かない方がいいのだ。

「いいから、一応電話して聞いてみたら？ 泊まってもいいかって」
「やつぱり聞かないとだめ？」

「だめ。許可もらわないと泊めてあげない」
「……わかった」

千世は携帯を取り出していくつかボタンを押し、耳に当てた。話しながら歩く千世のペースに合わせてゆっくりと歩く。春に向かう冷たい風が、腰まで伸ばした私の髪をなびかせると、隣から千世の短いため息が聞こえた。

どうやら返事は予想通りのものだったようだ。

「いっぱい話したいことがあるのに」

「あの人のこと？　だったら私聞きたくない」

「聞いてよー」

「そんなに何回も会ってるわけじゃないのに、話すことなんてないでしょ？」

「あるの！　樋口さんと木下さんに聞いた」

樋口さんは、あの男に呼び出されて一緒に会社を出て行った、あの親切そうな男の人。木下さんは、たしかあの受付の女の人だ。そういえば千世は、私がああの部屋から出た時樋口さんと話をしていた。私がああの男と部屋にいる間、木下さんとも少しだけ話をしたようだ。

「そうだ、じゃあ花夜子がうちに来ればいいんだよ」

「いや」

「お願い。誰かに話したいの」

「じゃあ他の誰かに話してよ」

「恥ずかしいから、はるくんには言えない」

「陽斗に話せなんて言っていないでしょ」

「だってなんでも全部話せて、それを全部聞いてくれるのって花夜子かはるくんしかないもん」

友達はいても、そこまで深い付き合いをしない千世だ。当然といえば当然。

そういう私も、人のことは言えないけれど。

実家には年に二度ほど、お盆とお正月くらいしか帰らない。私が帰る時葵さんはほとんど仕事に出ているので、千世と、陽斗も入れて三人でごはんを食べたり、テレビを見たり、朝まで話をしたり。いつまでも話題の尽きない私たちを見て、陽斗は呆れを通り越して感心していたりする。

けれど、今日は陽斗を呼ばない。千世が恥ずかしがって陽斗には話したくないと言うからだ。陽斗も千世の好きな男の話なんて聞きたくはないだろう。私も、陽斗には話さなくていいと思っている。あの男は千世にはふさわしくない。

「やっぱり小野宮専務って社内でもすごく人気があるんだって」

「ふーん」

「格好いいもんね」

「顔だけはね」

千世は延々と、樋口さんたちから聞いたという話をしている。やはりあの男は社長の息子で、次期社長候補だそうだ。名前は小野宮珠樹。他にも千世はいろいろと話をしていたけれど、もともと聞く気がなかった私はほとんど覚えていない。

それよりも私が気になっている話は、樋口さんと木下さんの話。私が見た感じでは、二人はお互いに信頼し合っているようだった。仕事に関して相手を尊敬し、認めているようにも見えた。しかし千世の話を聞くと、どうやらそれだけではないように思える。

樋口さんは木下さんの四年先輩で、木下さんが入社して初めて配属されたのは樋口さんと同じ部署だった。樋口さんは木下さんの教育係となり、二人は一年間一緒に仕事をした。その後樋口さんは部署異動となったが、それから二人は食事に行ったりして仕事のこ

とについて話をしているようだ。

二人のプライベートな関係について、千世はまったく気付いていないようだけれど。

「わたしって、入社したばかりの頃の木下さんに似てるんだって。

わたしも何年かたつたら木下さんみたいになれるかな」

「千世次第だよ。ところで人見知りの千世がよくそんなにたくさん話できたね」

「二人ともやさしくて、わたしが不安だって言ったらいろいろ話してくれた。専務のことにも気にしなくていいよって」

「いい人たちがいて安心だね」

「うん。わたし入社したら木下さんと同じ部署がいいなあ。女の人
は交代で受付するんだって。木下さんもあの部署にいたから人見知
り克服できたって言ってた」

たしかに、毎日顔を合わせる人たちだけでなく外部のお客さんの
対応をする受付は、恥ずかしくて話せないなんて言っていられない。
受付は会社の顔。受付の対応一つで、会社の印象は決められてしま
う。

千世がやる気になっているのであれば、今の千世には最適な部署
かもしれない。毎日受付ばかりではストレスが溜まるかもしれない
けれど、そうでもないようだし。

「あ、ねえそういえば、私のこと何か言ってた？」

少し気になっていたことだ。樋口さんは私があの男を引つ叩いた
ところを直接見てはいないけれど、木下さんはばっちり見ていたの
だから、あの場で話題になってもおかしくない。恥ずかしいのと同
時に申し訳ない。彼らの上司にあんなことをしてしまったのだ。

千世はおかしそうに笑う。木下さんは私のことを、元気がいい人

ですね、と言ったそう。話を聞いた樋口さんも、笑顔でうなずいていたとか。

「明日はるくんにも報告しなきゃ」

「そうだね。千世の就活がうまくいってないことすごく心配してたし。私のことは全然気にかけないのに」

「花夜子は心配しなくても大丈夫だって思ってるからだよ。第一志望のところに採用されるって。わたしも心配してない」

本当に大丈夫だろうか。千世と違ってどこから内定をもらっているわけでもないし、私が第一志望とする理由は、「役に立ちたい」「魅力を感じる」などではなく、本当に個人的なこと。事実を言えば必ず落ちる。だから、もっともらしい理由を書いた履歴書を送っているのだけだ。

「あ、はるくん来た」

翌日、陽斗に千世の内定報告をするため、私たちは陽斗の講義が終わるまで図書館で時間をつぶしていた。千世は落ち着きがなく立ったり座ったりを繰り返すので、どうしてそんなにそわそわしているのかと聞くと、忙しい陽斗をわざわざ呼び出して内定報告だけというのは悪い気がする、でも電話やメールではなく直接言いたい、どうしたらいいかわからないということらしい。どうしたらもなにも、もう陽斗には来てもらうことになっているし、今さらやっぱいいと言っても陽斗がよけいに気にすると言っと、やっと落ち着いたのだ。

「話したいことってなに？」

「うん。あ、ごめんね、忙しいのに急に呼び出して」
「いや。時間ならいつでもつくれる。春休みだしな。俺が先生に頼み込んで特別に授業してもらってるだけだし」

その熱心さには感心する。陽斗のいいところの一つだ。何に対してもまじめで一途。

千世も、すごいねーなんて言っただけで笑っている。こうして見ると、まるで恋人同士だ。千世にその気があれば、二人はそんな風に思わなくても、私は完全に邪魔者。今でさえ居心地が悪いのに。

「それで？」

「えっとね……わたし、就職決まったよ」

「決まったのか？ よかったな」

「うん、ありがとう」

陽斗は安心したように笑う。千世は頬を赤らめて照れているようだが、それでもうれしそうだ。

私が千世から報告を受けた時は、驚いたけれど素直に喜べた。心から「おめでとう」と言えた。でも、今はうまく笑えない。二人と同じように笑えない。

まだ二人は付き合っているわけではない。むしろ千世は、陽斗じやなく別の男が好き。それがわかっているのに、私の千世に対する嫉妬心はどんどん大きくなる。以前はうまく抑え込むこともできたのに、最近はそれも難しくなってきた。このままだと、きっといつか爆発する。

「ごめん、私今日バイトあるから」

「あれ？ まだ時間あるんじゃないの？」

「うん、でも早めに行って準備したいし」

「そっか。付き合わせちゃってごめんね」

「バイト、がんばれよ」

「うん。陽斗も千世のながーい話に付き合っただけで。面接で出会ったすてきな人のこととか、いっぱい話したいんだって」

「もう、花夜子！」

千世は嘘をつけない。聞かれれば、すべて話してしまうに違いない。昨日はあの男にムカついて、陽斗には言わなくていいなんて思っていたけれど、今はまったく反対だ。言ってしまう方がいい。言ったところで表面的なものが変わるわけじゃない。陽斗が焦って悩むだけ。千世の気持ちが加速して、だめになった時に大きく傷つくだけ。

だめにならなくても、あんな男相手じゃ幸せになんてなれない。やめさせなきゃだめなのに、それとは逆のことしかしていない気がする。

後で後悔するのはわかっているのに。私だって、自分の醜さが嫌になるのに。どうしてこうなんだろ。自己嫌悪に陥らない日なんてない。

「はあ、どうやって時間つぶそうかな」

千世にはああ言っただけで、バイトの時間まで三時間もある。準備することなんてないし、移動時間を考えると買い物にも行けない。今の気分のまま近くの喫茶店に行っても、よけいに落ち込みそうだし。家に帰ってテレビでも見て、頭を空っぽにしようか。

ため息をついた瞬間、誰かにぶつかった。ぶつかるまで気付かなかったのは、うつむいて歩いていたから。「何か」ではなく「誰か」だとわかったのは、立派な革靴が目に入ったから。

「すみません」

「いえ。しかし君はよくため息をつく人ですね」

とっさに謝ってしまったことを悔やんだ。聞こえた声、見上げた顔に、不快感がこみ上げる。きっと私の顔にも出てしまっているけれど、隠そうなんて思わない。

小野宮珠樹。私の脳には「敵」としてインプットされている最悪な男。その男がなぜか、今私の目の前に立っている。

目の前の男、小野宮珠樹は、本性を知らなければすっかり惚れてしまいそうな、ものすごくやわらかな笑顔で私を見下ろしている。身長差があるから仕方がないことだけれど、見下ろされるといっのは気分がよくない。いくら相手に敵意や悪意がなくても、いくら笑顔向けられていても、目の前にいるのがこの男なら不快になるのは当然だ。

そもそも、この男がここにいる理由がわからない。春休みで学生も少ないこの大学に、何の用事があるというのだ。もしかして、医学部かどこかの教授とか事務の人に会う約束でもあるのだろうか。

「どうしてあなたがここにいますか」

「個人的な用で君に会いに」

「は？ 個人的な用があるなら私にじゃなくて千世にでしょ？」

「いいえ、君です」

わけがわからない。個人的な用ってなによ。まさか、昨日のことで文句でも言いに来たわけ？ わざわざ大学まで自分から出向いて？ でも、待つて。なんかいろいろおかしくない？

「どうして私がこの学生だっけ知ってるんですか」

「樋口から聞きました。ああ、樋口というのは」

「知ってます。どうして樋口さんが知ってるんですか」

「泉崎さん——君のお姉さんが話してくれたみたいですね。同じ大学、同じ学部に通っていると」

そういうことか。千世の履歴書を見れば、千世がどの大学に通っているかはわかる。それにしても、樋口さんって人は良さそうだ

けど口が軽いのね。プライバシーも何もあつたもんじゃない。

ぼそぼそと文句を言つと、小野宮珠樹はそれを否定した。仕事にどうしても必要なことでなければ、個人情報なので話せないと言う樋口さんに、この男が無理やり話させたそうだ。

「樋口は頭が固すぎるんです。来年からうちの社員になる方のご家族のことくらい、すぐに教えてくれてもいいと思うんですが。電話番号や自宅の住所を聞いたわけでもないのに」

「あなたのその考えの方がおかしいと思います」

「そうですか？ 君もご友人とこういつた話はするでしょう。誰がどこの大学に進学しているだとか、どこの企業に就職するだとか」

「あなたと私では同じ内容でも重みが違います」

私のようなただの大学生と大企業の偉い人では、影響度が違う。

付き合いの幅が広いこの男が不用意に口にすれば、たちまち世間に知れ渡ってしまうのだから。まあ、私がどこの大学に通っているかなんて誰も興味がないだろうし、だから困ったことも特に起こらないと思うけれど。

「ところで、今春休み中なんですけど。なんで私が学校に来てるってわかつたんですか」

「ああ、そういうばそうですね。すっかり忘れていましたよ。君に会えたのは運がよかつたということですね」

「本当に偶然ですか？」

「それ以外に何がある？」

まさか私が君の後をつけていたとでも言いたいんですか、と言って小野宮珠樹は笑う。そこまでしたとはさすがに思わないけれど、偶然にしては、私に会いたかつたという相手にとって都合がよすぎる展開だ。春休み中なのに私が大学に来ていて、しかもこの広いキ

ヤンパスの中でたまたまぶつかるなんて。

たとえ春休み中でなくても、連絡でも取り合って待ち合わせをしていない限り、目的の人物に会うことなんて難しいというのに。私は本当に運が悪い。

「それで、私に用って何ですか」

「私は君に興味がある」

せつかく不快感全開の顔で睨みつけていたのに、その顔も緊張とともに緩んでしまった。おそらくとても間抜けな顔になっているはずだ。小野宮珠樹が噴き出した瞬間に慌てて元に戻したけれど、この男は私に遠慮もせずに声を上げて笑い続けている。

なによ。いくらおもしろかったからって、そんなに笑うことないじゃない。涙まで浮かべて笑われたら、私だって恥ずかしくなる。

私が顔を真っ赤にしてうつむくと、小野宮珠樹の笑い声が止んだ。私の頭の上で、短く息を吐く音のあとに咳払いが一つ。

「失礼。いえ、申し訳ない。予想外の反応だったものですから」

「当然です。意味がわからない」

「わかりませんか？ そのまま素直に捉えていただいてけっこうですよ」

素直に捉える？ 興味があるということは、つまりどういう形であれ私に好意があるということだ。それをそのまま素直に受け取れると？

そんなことできるわけがない。だって私なら、初対面でいきなり自分を引つ叩いた相手に好意なんて持てないから。それにきつと、相手の顔を思い出すだけで腹が立つはずだ。自分から相手に会いに行こうという気になるなんて、どうかしてると思えない。

この男性格が悪そうだし、昨日のことを根に持っていて私をだま

すつもりなんだ。絶対そうに決まっている。

「どうやら信用していただけじゃないようですね」

「あなたには信用できる要素が皆無なので」

「そうでしょうか。自分で言うことでもないですが、私は部下からの信頼も厚いですよ」

「私はあなたの部下じゃない」

「たしかに。ですから君を私の部下にと誘いにきたわけです」

この男が言うことは、いちいち突拍子がない。まじめな顔で冗談みたいなことを言うから、返答に困る。

もし本気で言っていることなら、いくら相手がこの男でも、軽く流してしまうのは失礼だと思う。けれど、もしこの男が私をからかっているだけなら、まじめに答えればきつと笑われる。そうしたら、ム力ついてまた手が出てしまうかもしれない。

昨日のことを思い出し、男の頬に目をやった。まだ完全には赤みが引いていない。

初対面でいきなり叩かれても、どんなに失礼な態度を取られても、この男はしっかりと私に向き合った。あんなことをされたら、多くの人は頭にきて怒鳴りつけるか、相手にせず無視するかのどちらかの行動を取ると思う。

小野宮珠樹は多少の怒りは見せたものの、冷静さを失わず、最後まで私を対等な立場の人間として扱った。自分の言いたいことを言っただけのようにも思えるけれど、納得できる部分もあったし、どういう理由があったにしても私の要求を受け入れたことも事実だ。

小野宮珠樹は、頭がいい男なのだと思う。そんな男が、ただの女子大生相手に仕返しをするために、いつまでも執着するような幼稚なことをするだろうか。

「……お断りします」

しばらく考えた末、この件に関しては小野宮珠樹を信用することにした私は、はっきりとそう答えた。たとえ仕事上の付き合いだけだとしても、たとえ小野宮珠樹が信頼できて頼もしい上司であるとしても、この男の下で働くななんて絶対にいやだ。

「もうどこかの企業から内定が出ているんですか？」

「いいえ。でも、行きたいところがあるんです」

「それはどこですか？」

「あなたに言う必要はありません」

小野宮珠樹は腕組みをして数秒考えた後、昨日と同じようにいきなり私の手首をつかんで歩き出した。振りほどこうとしても無駄、放せと言っても無駄。何をしても無駄だった。

そのまま私がつれて行かれた先にあつたのは、青いフェラーリ。助手席に無理やり押し込まれて文句を言おうと思ったら、ボタンとドアが閉められた。その後すぐに運転席に小野宮珠樹が乗り込むと、車は勢いよく発進した。

「ちょっと！」

「シートベルトは締めてくださいね」

「どういっつもりよ！」

「落ち着いて話ができる場所に移動しようかと」

身勝手にも程がある。部下に信頼されているというのが真実なら、その部下の人たちはこの男がわがままで自己中心的なやつだということを知らないんだ。

「降ろして。私このあとバイトがあるんです」

「何時から？」

「一時間後」

「本当は？」

「本当です」

「嘘でしょう」

なんなのこの男！ 何の根拠があって私の言うことを嘘だと決め付けてるわけ？ たしかに私は嘘をついているけど、それは私だけが知っていることだ。この男が嘘かどうかを知り得るはずがない。もし私が本当のことを言っているなら、この男の発言は失礼すぎる。そりゃあ、嘘をついて逃げようとする私も失礼かもしれないけど、この男が私を無理やりどこかにつれて行こうとするのが悪いんだから。

「誘拐されたって、警察に通報しますよ」

「大ことにしたいならどうぞご自由に」

この余裕な感じがまたムカつく。私が本気じゃないことをわかっている。

だって分が悪いもの。一流企業の専務で、表面的には紳士なこの男と、その男に反抗して困らせるばかりのただの女子大生。どちらが説得力のある話ができるか、どちらがより信頼できるか。そんなの誰に聞いたって答えは同じだ。

この男のために、被害妄想の激しい嘘つき女だなんて思われたいはない。

「本当のことを言ってくれば、その時間までには話を終わらせます。もちろん、アルバイト先までは送りますよ」

「……三時間後です。でも送ってくれなくてけっこうです。あなたにバイト先を知られたくないし」

「頑固ですねえ」

そこからはお互いに沈黙。どちらも何も話さなかった。

しばらく窓の外に目をやったまま、何も考えずにぼーっとしていると、運転席の方から「もうすぐですよ」と声が聞こえた。正直、目的地なんてどうでもいい。私は早くこの男から解放されたい。

と、思っていたのに。男が何のためらいもなく車を進める先にあるものを見て、私は思わず息を呑んだ。そこは世界的にも有名な超高級ホテル。もちろん私は宿泊したことも、中に入ったことすらない。

呆ける私を乗せたまま車は駐車場に停車し、運転席から降りた男が助手席のドアを開ける。

「降りてください」

「ここで、なにを……」

「言っただでしょう。落ち着いて話ができる場所に移動すると」

まさか、こんな場所につれて来られるなんて。どこかその辺の喫茶店くらいかと思ってたのに。

ぼけつとしたまま動かない私に痺れを切らしたのか、小野宮珠樹は私の肩を少し強い力で掴んだ。

こんな高級ホテル入りたくない。小野宮珠樹には似合っても、私には全然似合わない。周りの人に笑われそうだ。でも降りないと、この男は絶対私を解放してくれないだろう。

私はしぶしぶ車を降りた。ゆっくりと歩き出した男の後についてホテルに入ると、フロントの人が全員そろって深々とお辞儀をする。なんだか異様な雰囲気だ。普通の客に対するものとは違う気がする。エレベーターに乗り込んで、男が押したボタンは最上階を示す数字のもの。ぐんぐんと上昇するエレベーターは、途中で止まることなく目的の階についた。

通された先にあつたのは、とても広い、リビングのような部屋。大きな液晶テレビにたくさんの本が並んだ書棚、ガラスのテーブルと高級感漂うソファ、床にはふかふかのカーペット。奥の扉は開け放され、ちらりと豪華なベッドがのぞいている。あれはきっとキングサイズね。

スーツの上着を脱いだ男が私を見た。じつと見つめられて、顔に熱が集中する。顔だけはいい男だからしかたがないけれど、少しドキドキしてしまった。私のほか。

「どうぞ、掛けてください」

男の視線を避けるようにふいと顔を背け、ソファに座った。昨日と同じだ。男が向かい側に腰掛ければ、私にとっては時間の無駄とも言える話が始まる。

……いや、昨日の話はそうでもなかったのかもしれない。少なくとも、意味はあつた。

「先ほどの話ですが」

「嫌です」

「……少しくらい考えてくれてもいいのでは？」

「考える余地ありません。あなたの下で働くなんてまっぴらよ。

そういうことなので、もう私にかまわないでください。さようなら」

ソファの座り心地をたしかめる間もなく立ち上がり、ドアへと足を向けた。そんな私の腕を、男がつかむ。そして次に発せられた言葉はこれまた突拍子もなく、今度は手ではなく足が出そうになった。さすがに下品だと思って自重したけれど、昨日なら確実にこの男の

急所を蹴り上げていただろう。

私をなんだと思ってるの。

「絶対に嫌よ！ 失礼にも程があるわ！」

「残念ですが予想通りの反応ですね」

「だったら最初からこんな話しないで！」

男が言ったこと、それは私をばかにしているとは思えないものだった。

——私の「下」ではなく、私の「隣」ではどうでしょう。部下ではなく恋人、もちろん契約ですから気持ちはいいりませんし、君が望むのであればそれなりの報酬もお支払いします。

つまりこの男が考えているのは、私を女除けにしようということ。私が部下になれば一番都合がいいが、それがだめそうなのでせめて恋人のふりをしろ、と言っているのだ。

昨日の千世への態度から考えても、この男が自分に好意を寄せる女をつつとうしく思っていることがうかがえる。こういう話を私にするくらいだから、特定の女性もないのだろう。

だからって、昨日会ったばかりの、何も知らないと言っていい相手にこんなことを頼む？ それに「望めば報酬は支払うから」だなんて、私を見下してるとしか思えない。

「君には受け入れてもらわなければ困る。どうしても嫌だというなら、こちらにも考えがあります」

「考えてなによ」

「君のお姉さん——千世さんの入社はお断りさせていただく」

開いた口がふさがらなかった。私が承諾しなければ千世の入社を

拒否するなんて、自分のためなら他人はどうでもいいと言っているようなものだ。立派な大人の発言とは思えない。

本当に、最低な男。もし昨日に戻れたら、絶対、千世の頼みを聞いて会社について行ったりしないのに。この男と出会わなければ、今こんなことにもなっていないはずだ。

「私を脅してるの？」

「そんなつもりはありませんが」

「そもそも内定を取り消すなんて問題よ」

「まだ正式な契約は交わしていません。内々定の段階ですし、法的に問題はありませんよ。公になれば会社の信用問題にはなるでしょうが、それも一時的なものです」

たえそんなことがあつたとしても、会社にとってはほぼ何の利益もないということだろうか。周囲からの信用を失っても、それをすぐに回復する自信があると。

ハツタリかとも思ったが、どうやらこの男は本気だ。だとすると、私がこの男の要求を受けなかった場合、千世だけが大きな損害を被ることになる。

こちらは受けても受けなくてもメリットがない。一方この男には困ることがほばないどころか、私が受ければそれが自分の思い通りの結果になる。悔しいけれど、立場と力に差がありすぎる。

千世の内定は、この男の独断で決まったようなもの。他の面接官たちは、千世のおどとした態度を見て反対したらしい。けれど、この男は千世を有能だと判断した。教育すれば会社にとって役立つ存在になるだろうと。だから手放すのは惜しいが、そうしたところでたいした損失にはならない。代わりはいるということだ。

会社の人事はほとんどこの男に任せられているため、社長も口出しはしない。もともと千世の合格に反対していた人事部の社員は、この男が提案すればそれに乗るだろう。

「卑怯よ」

「君にどう思われようとかまわない」

冷たく言い放つこの男は、きつと自分以外の人間に興味なんてないのだ。それなりの権力を与えられたからこうなったのか——いや、もともとこんな人間だったのかもしれない。

なぜこんなことになったのか、どうして私が巻き込まれなければならないのか。今日ほど自分の運の悪さを呪ったことはない。

「……私は、なにをすればいいの」

私は、千世が誰かのせいで嫌な思いをするのは許せない。それが私であっても。私が、こんなつまらない男のつまらない頼みを断ることで千世が泣くようなことになれば、私は今よりも自分を嫌いになる。

千世は私の大切な姉だ。時々どうしようもなく憎らしく思うこともあるけれど、それでも私は千世を必要としている。だって千世はたった一人、私を家族として愛してくれる存在なのだ。

「君はただ、私の恋人として、恋人らしく振舞ってくれればいい」

「それがどういふことかって聞いているの」

「君は男性とお付き合いしたことがないんですか？」

「あるわよ！　ただ普通の男とあなたとじゃ違うでしょって言うてるんじゃない！」

付き合っていた彼とは、つい最近別れた。どうしても、その彼を本気で好きになることができなかった。やっぱり私は陽斗が好き。それにきつと、相手もそれほど本気じゃなかった。今までだってそうだ。最初はやさしく接してくれていても、深い関係になるとそ

ればかり求めてくる。何度が断っていると、そのうち連絡をよこさなくなつて終わり。

私がそれなりの気持ちしか持つていないから、相手も同程度の気持ちでしか接してこないのだ。

「普通でかまいませんよ。今までの方と同じと思つていただければ」

とはいえ、普通の恋愛経験なんてないに等しい私には、その「普通」がわからない。今回だつて、普通じゃない。

けれどある意味、今までの男より気が楽な部分もある。無理に好きになる必要がないのだから。それ以前の部分に大きな問題はあるのだけれど、この際それは無視しなければならぬ。そもそも初めから、私の気持ちなんてまったく関係ないのだ。

「私に付き合つてる人がいたらどうするつもりだったんですか」

「もしそういう方がいるのであれば、その方には事情を説明しておけばいいでしょう。まあ、気分は悪いでしょうが、我慢していただくしかなかったでしょうね」

「本当に自分勝手ですね。それに、どうしてそこまで私にこだわるんですか」

「君は私に好意を持つていない。むしろ嫌っている。おそらくこれからもそうでしょう。だからです」

自分を好きな人や自分に媚びる人ではだめだということか。たしかにそれでは意味がない。この男が求めているのはあくまでも、気持ちを持たずに恋人の「ふり」をしてくれる人間なのだから。

「君を私の部下にしたいと言つたのは、君を優秀と認めたからです。

そこは誤解しないでいただきたい。君は私に対して真正面からぶつかってきた。後先考えないところは多少危険ではありますが、勇気もある。私の意見にうなずくばかりでなく、首を振る人間も必要なのは事実です」

再びソファに腰掛けて、男はゆっくりと話す。昨日のたったあれだけのことで、ここまで自信を持って私のことを話せるなんて。私だって、自分についてよくわかっていない部分も多いのに。

ただ、私が「優秀だ」というところには、素直にうなずくことができないけれど。

「君はもつと自分に自信を持ったほうがいい。せつかくいいものを持っているのに、それを埋もれさせていてはもったいないですよ」

「あなたに言われても嬉しくない」

「そうですか」

人前では恋人のように振舞うことを約束した。お互いのことは名前前で呼び合い、恋人らしくデートもする。

その代わり、千世にはこのことを言わない。周りの人間には、私の情報は一切話さない。

期限は半年。ただし、この男が偽りの恋人を必要としなくなれば、その時点で契約終了。この男が誰かに私のことを話してもそこで終わりだ。

報酬なんて望まない。私は、ただ千世が幸せであればそれでいい。

「さあ、話は終わりましたし、アルバイト先まで送りましょう。間に合いますか？」

「いいって言ったでしょ」

「私たちは恋人ですよ」

すでに恋人としての時間は始まっているらしい。私の肩を抱く大きな手に不快感を覚え、その手を振り払いたいという衝動を必死に抑えながら、男とともにホテルを出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0393y/>

Cross

2012年1月8日20時50分発行